

百合子賞 小説部門 正賞 受賞作品

誰<sup>た</sup>そ彼<sup>がれ</sup>



郡山市立郡山第五中学校

鎌田 滯

憧れの高校入学から一年が経とうとしている頃だった。入学時の妙なテンションから運動部に入ってしまった私は部活の疲れと、いわゆる女子特有のドロドロな友達付き合いに毎日疲弊していた。今日もベッドに潜り込み、まだ毛布が手放せない布団の中で眠りに落ちた。

そこは見覚えの無い、見渡す限りモノクロで描かれた砂漠のような場所だった。後ろからの視線をふと感じ、思わず振り向いた。そこには、いつだか歴史の教科書で見たことのあるような人影が立っていた。この印象的な服装……

「日本兵——」

私の脳は本能的にサイレンを鳴らす。逃げなきゃ！そんな警報も虚しく、私の体は金縛りにあつたかのように動かない。

「もう駄目だ。」

小さく眩き、まぶたをぎゅっと閉じた時、滝のような汗を流し、まだ何から逃げるようにして私は目を覚ました。

その後も何度も似たような夢をみた。しかし夢をみるごとに、恐怖は薄れていった。なぜなら彼は夢の中でただ立っているだけなのだから。次第に私は夢の中で彼から逃げようとするをやめた。同時に彼は一体何者なんだろう、という興味さえ沸いてくるようになっていた。

それから数日後、父から伝えられたのは悲しい事実だった。元気だった曾祖父の緊急入院。それも末期の癌だそう。昔ながらの我慢強いひいひいちゃんのことだ、きつと「多少の体調不良は歳のせい」とでも言っ、みんなを煩わせないようにしていたんだろう。ひいじいちゃんは優しい人だ。小柄で目がクリクリしていて、畑仕事が好きで。ああ、考えだすとキリがない。とにかく会いたい。病院は車で二時間の距離だが、車でしか行けない場所だ。私は、次に父が仕事の休みをもらうまで待つことしかできなかった。

昼休みの校庭。いつもなら友だちとここに来るのだが、タイミングが良いのか悪いのか、日直の仕事があり、今日はぼっちだった。今にも雨が降り出しそうな空の下、木の根元に寝転び、静かにまぶたを閉じ、五感をシャットダウンしようとする。

「おーい。具合悪いんか？」

私の脳みそのドアをノックするように、低めの声が突然近くから聞こえる。

こいつはクラスメイトの春樹。お調子者だけど、誰かがハブられてぼっちの時には必ずと言っていいほど声をかけてくれる。クラスの潤滑油のような存在だ。

「ちよつと考え事……」

適当な返事で流そうとする。せっかくひいひいちゃんについて、気持ちの整理ができると思ったのに。心の中で舌打ちをする。わざわざ心配してくれているのに。こんな私自身の醜い一面も嫌いだ。

「一人で考え事なんてらしくねーじゃん。また、嫌がらせでもされた？」

普段なら正解かもしれないが、今日は違う。それにしても男子の洞察力もなかなかだと感心する。

「嫌がらせなんていつものことですよ。私、いちいち気にしてないから。」

「そうなん？じゃあ何。話すだけでも楽になっから。俺、誰にも言わねー自信あるから、言ってみ？」

彼の言葉は妙に軽く、信頼性は低かったが、それがかえって私の心のハードルを下げた気がした。

「ぶっちゃけるとさ、ひいおじいちゃんが癌になっちゃって、もう……」

言葉に詰まる。客観的な事実しか言えない。そんな自分が悔しくて、何もできない自分に腹が立って、心の底から何かが出てきてしまいそうになるのを、ぐっとこらえた。そんな私を見る彼の目は少し細くなり、おもむろに口をひらく。

「俺もさ、お前とおんなじ思いをした。四年前、大好きだった親父が亡くなって……癌だった……病気が分かった三か月後に死んじまつたけど。でもさ、最後まで懸命に生きることの大切さを教えてくれた気がすんだよね。」

そこまで言くと、彼は頬を伝う涙をそっと拭う。ショックだった。彼がこんなにも早く親を亡くしていたなんて。しかもそれを感じさせないくらい、彼は普段から明るかったのだ。

発せられた言葉を一つずつ飲み込んでいくように沈黙が続く。しばらくすると彼はため息をつき、白色の隙間から青色がのぞき始めた空を見上げ、まるで自分自身に問いかけるように呟く。

「結局死ぬのに生きるって、一体何なんだろうな。」

そう言うとき静かに立ち上がり、校舎の中へと消えていった。あんなこという奴だったわけ。しかし、その一言が私の中の何かを変えた。

死についてばかり考えていた私だったが、生と死は真逆に見えて、実は同じ人生の一つだと気付かされた。生きることはいつか死ぬこととあり、死ぬことはそれまで生きてきたということなのだ。ありがとう、と口の中で呟いて、私も彼の後を追った。

一週間のハードな人間関係にストレスが溜まった私にとって、たった二日間の休日さえ至福の時間となる。今日もアラーム代わりに推しの曲を聴いて目覚める。眩しさに慣れない目をこすりながら、スマホの画面を見る。時間はすでに午前八時を過ぎていた。「今日はまだ土曜日か……」と小さな幸せを噛みしめながら、リビングへ向かう。しかも今日は一時帰宅の許可が下りたひいじいちゃんが退院し、明日には会いに行けるのだ。

「おはよ。」

「おはよ。」

休日なのに珍しく起きている母が返事をする。しかし、こちらに背を向けて、熱心に何かを読んでいる。いつもと違う光景を不思議に思った私は、母の後ろに立ち無機質な紙面を覗き込む。

「終戦後八十年？」

大きな見出しが目に入る。

「うん。今年は節目の年だから、色々イベントが多いらしいよ。」

「ふーん。」

正直言うと、戦争についての話題は興味が無い。適当な返事をした私にはお構いなしに、母は話し始める。

「あつ。そういえば、ひいじいちゃんにお兄さんが居たの、知ってた？戦争に行つて亡くなったって聞いたことあるなあ。」

寝起きに唐突な話をされ、ちよつと頭が追いつかない。

「いや、初耳。そうだったんだ。」

「えつ。もうちよつと興味持ちなさいよ。あんなね、考えてもみなさいよ。もしひいじいちゃんが招集される年まで戦争が続いてたら。」

もし、戦死していたら、じいちゃんもお父さんも存在してないのよ？ あんただって生まれてこれなかったんだから。」

正直、うるさい。急に説教を始める母に、絶賛反抗期の私は少し苛立ちを覚えた。言い返したい気持ちを深呼吸して抑える。でも、冷静に考えてみると確かにそうかもしれないとも思ってきた。私には今ここに「命」があるけれど、ひいじいちゃんのお兄さんは八十年以上も前に短い人生を終えていたんだ。その時、ふと忘れかけていた例の夢を思い出した。もしかして……。今の私には、もう夢に出てきた日本兵の彼がひいじいちゃんのお兄さんじゃないか、そう思わずにはいられなかった。何か伝えたかった事があるんじゃないか、そんなオカルト染みた発想なんて普段はしないのに。私の頭にはどうしてもそんな考えが絡みついて離れない。

「なんて言ったらいいのかよく分からないけど、やらなきゃいけない事がある気がするの。私の使命っていうのかな……。」  
母は驚いたように黙っていた。しかししばらくするとその顔に微笑みを浮かべ、私の目をまっすぐ見つめて、うなずいた。私は言葉を続ける。

「知りたいな。ひいじいちゃんのお兄さんがどんなふうに生きて、戦争に行ったのか。どんな最期を迎えたのか。」

名前さえ知らないなんて、平和なこの人生を生きるには無責任すぎる。そんな自責の念もあった。網戸越しにレースのカーテンを揺らしながら、新緑の香りをまとった風が入ってくる。私たちを見守るように、二人の間を優しく駆け抜けていった。

翌日、予定していた通りにひいじいちゃんの家にお見舞いに行くことができた。こんなに一日一日が長く感じたのは、何年ぶりだっただろうか。家に着くが、自宅前の畑にはひいじいちゃんの姿は無い。今までは畑をいじりながら、私たちの車が着くのを待っていてくれたのに。家に入るとひいじいちゃんはベッドに寝ていた。痛み

止めが効いているらしく、辛そうな表情ではなかったのがほんの少しの救いだった。

一時間も経たないうちにひいじいちゃんは居間に姿を現した。祖父に体を支えられながらも、なんとか自分の脚で歩いていた。

「ひいじいちゃん！」

思わず声をかける。すると私を見た瞬間彼は、クリクリした目をもっと丸く輝かせて私を驚いたように見つめた。

「よく来たなあ。じいちゃんさ、こんななつちまつて、もう駄目だよ。」いつもの東北地方の浜の訛りが、今日は妙に心地いい。

「大丈夫だよ。元氣出して。」

気の利いた言葉の一つもかけられない自分の中で「ばっか」と言いつつも優しく微笑む。会いたい気持ちばかりが膨らみ過ぎていて、余命宣告を受けた人に何て声をかけたらいいかなんて、考えてもいなかったのだ。そもそもこの歳で上手く声をかけられる人なんているんだろうか。そんな私の心の内を察してか、ソファに横になった彼は、

「元氣だったかあ？まあ大きくなったんでないかい。ご飯いっぱい食べー。」

と、いつもの調子で、いつものセリフを口にする。今までは「はい」と流していた会話も、今となっては八十歳近く離れていても必ず通じる、愛情がいっぱい詰まった言葉だったのだと気がついた。自分の病気をさしおいてひとしきり私の心配をした彼は、お粥を二口、三口食べた後薬を飲んだ。おそらくは痛み止めだろう。ひ孫の前で辛い顔は見せたくない、そんな優しさがまた、伝わってくる。

痛み止めが効いてくる頃を見計らって、私はついに気になっていいことを聞こうと試みる。私が生まれてから今まで、一度も出てこなかった戦争の話。聞いても良いものなのか正直迷ってはいたが、

横に座っていた母が膝にポンツと手を置いた。それに後押しされるように私は切り出した。

「ひいじいちゃん、戦争の時の事、今でも覚えてる？お兄さんが戦争に行つて、亡くなつたつて聞いたんだけど。」

恐る恐る聞いてみる。傷をえぐらないよう、言葉に気を付けながら。しかし私の心配をよそに、

「なんだあ、今の子が聞いても面白くねえぞお。」

と、あつけらかと答えた。最初のうちはタンスの奥から思い出という品を引っ張り出すように、ぼつりぼつりと話し始めた。しかし驚くことに話が進んでいくにつれ、当時の記憶はもろろん、感情すらも鮮明に話してくれるようになったのだ。まるでつい昨日の事のように。この地域の言葉はだいぶ訛りが強く聞き取るのには苦労したが、貴重な話をまとめるとこういうことだった。

曾祖父は次男だと思っていたが、実は三男だった。長男は生まれて間もなく亡くなつてしまつていた。昔はよくあることだったらしい。そしてその後、記憶の中のお兄さんである次男が生まれた。高祖父は、もう息子を失いたくない、という思いから彼に「不可死」と名づけようとした。読み方は「ふかし」だ。しかし役場に出生届を出しに行った際、窓口の担当者に、

「そんなふざけた名前、あるわけねえ。修正しろ。」

と突き返された。高祖父は理由を話して反論したがお役人は、

「修正しろ。」

の一点張りだったらしい。そして怒つた高祖父は、次男をこう名づけた。「修正」と。私はてっきりからかわれているのだと思ひ笑つていたが、周りの雰囲気から真面目な話だと気付かされた。

そんな修正さんが戦争に行くことになったのは十八歳を過ぎた頃だった。基本的には徴兵は二十歳からであったが、志願すればその前に徴兵検査を受けることができたそう。徴兵検査とは、健康・

体格・視力や聴力などを判断し、徴兵の可否を判断したりその後の配属を決めたりする為のものだったらしい。当時は「お国のため」という思想で教育されていた時代だ。地方であっても早く戦争に行きたいと思う若者がいるのもうなずける。末っ子だった曾祖父は、当時七歳だった。

やがて子供だった曾祖父の知らないところで話は進んでいき、地域の皆の「万歳」で送り出された修正さんは、兵隊になった。まずは神奈川県横須賀の駐屯地で海軍所属となり、基本的な訓練を受けていたという。しばらくすると修正さんの部隊にも出航命令が出された。サイパン島の守備隊を一年間ほど務めたようだ。そこで彼は同郷の人と知り合いになり、帰郷するその人に角砂糖と干しバナナを渡し、実家に届けてくれるよう頼んだ。まだ日本にも多少余裕があつた頃のようにだが、地方の農家も田んぼの等級によって決められた分の米を、国に納めなければならなかった。残る米の量は節約しても、なんとか家族みんなが食いつなげるくらいだ。甘いものは減多に手に入らず、遠い地より届いた兄からの贈り物にはみんな大層喜んだそうだ。

サイパン島での務めを終え、彼は幸運にも無事に横須賀へ帰港した。無事に戻つたという知らせはやがて東北の実家にも届き、彼らを労う為に家族との面会が許可された。曾祖父は九歳になっていた。当時は大変貴重であつたが、畑で作つた小豆と隠しておいた砂糖を使い、修正さんが好きだつたあんこ餅をこしらえた。そして曾祖父は母親と二人、人でぎゅうぎゅうになつた列車に揺られ、遠い横須賀まで彼に会いに行つた。いざ面会の時間になると凛々しい兄の姿が眩しく見えたと同時に、懐かしさ、また離れ離れになる寂しさ、あふれる感情に押し流されそうであつたという。そうこうしていると上官の怒鳴り声が聞こえてくる。

「家族が来ない奴には、外出許可は出ておらん。戻れ。」

駐屯地から一時外出許可をもらえるのは、事前に申請し、家族が当

日会いに来られる者のみだったのだ。その時、彼は口を開いた。

「彼らの家族はこれから来ます。外出許可は私が出しました。」

知らぬうちに外出許可が出せるほど出世していたことには曾祖父も驚いた。そして、この言葉に上官は納得したように戻って行ったという。もちろん家族が来るなんて話は、嘘だ。しかし遠方から徴兵されている者。実家には女子供しかおらず、食べることも苦労している者。皆が等しく家族に会いに行けるわけではないのだ。だったらせめて、一日の外出許可くらい出してあげたい。そんな彼の優しさだったのだろう。それまで淡々と話していた曾祖父であったが、この面会時の話をしている間はゆっくり、ゆっくり、言葉を選んで話していた。そしてその目には涙が浮かんで、やがて頬を伝って落ちていった。

「会いだくても、会えねえんだ。周りで家族が会いに来てるのさ見で、どんな気持ちだったか。」

この言葉は私にとって、現実から目をそむけなくなる程に、重たかった。いつ命を落とすかもしれない日々を生きる上に、愛する家族を一目見ることも叶わない人生。そしてそれを幼いながらに目の当たりにした曾祖父。八十年以上経っても色あせず、あふれ出る感情が幼い子供の心にどれほどの傷を付けたのか、考えるのも恐ろしかった。

その後太平洋戦争が激しくなるにつれ、海軍では通信兵の需要が増えていた。彼は横須賀にある通信学校に所属し、翌年通信兵としての資格をとった。そして同じ十月頃に船に乗り、その役目を果たすべく再び出航していった。

昭和十九年一月九日。マーシャル群島近海にて戦死。東北の実家に戦死公報が届けられたのは、二月に行われていた旧正月の夕方だった。それから半年が経ち季節は夏になった頃、遺骨が届いたので取りに来るようにと連絡が入った。高祖父が引き取りに行ったが、帰ってきて皆驚いたという。骨壺の中身は彼の生前の写真が一枚。たっ

たそれだけが入っていた。

そこまで話すとひいじいちゃんは、

「疲れた、ゆっくりしてけえ。」

と言つて、また自室のベッドへと戻って行った。私もまた、涙をこらえながら話を聞いていたためか、ドツと疲れが襲ってきたので、家に帰ろうと両親に提案した。隣では既に涙腺が崩壊している母が涙を拭いている。母曰く、子供を産むと涙腺が緩くなるんだとか。まあこれは日常だが、父も涙目だったのには驚いた。

帰り道、父は生まれた時から上京するまでの十八年間でひいじいちゃんと一緒に暮らしていたが、実は今日初めて聞く話がほとんどだったと話してくれた。普段は寝てしまう帰りの車の中で、私はひいじいちゃんの話を何度も何度も思い出しては、考えていた。修正さんが築いてきた歴史は、私たちが関心を失えば、いとも簡単に闇に葬り去られる。写真や遺品もいくつかはあったかもしれない。しかし不運なことに、この地区は十四年以上も前に大きな地震がもたらした津波の被害に遭っていた。家族は高台に逃げて無事だったが、津波は家と共に、全ての思い出の品をも海へと持ち去ってしまったのだ。重たかった墓石だけが、離れたところで偶然見つかった。私の記憶には無いが現在墓石は修復され、山寄りの墓地に新しい墓石と共に立っている。だから、修正さんに関するものはこの墓石に刻まれた名前のみだそう。そしてその人生を知る人もまた、ひいじいちゃんのみだったのだ。今日までは。もし勇気を出して聞いていなかったら、修正さんがどんな人だったか、誰も知らずに生きていくことになっていただろう。

「危なかった。」

思わず呟く。車内の家族は誰も反応しない。皆疲れているのか、私と同じで各々考えるところがあるのだろう。ふと私の頭をよぎった

のは人は死んだらどうなるのか、ということだった。物質的にはなく、生きている人にとって。時間が経てば自分を知っている人が減り、それを伝える人も減り、やがては誰からも忘れられるの？初めから存在しなかったかのように？様々な疑問が私の脳内を飛び交う。見慣れたいつもの高速道路の景色をぼんやり眺めながら考えにふけていた。いつしか眠ってしまった私は自宅の前で母に起こされた。

翌日から、またいつもの学校生活が始まった。キツイ部活や女子の人間関係もある上に、二週間もすれば期末テストだ。しかし今の私にとっては、以前ほど高い壁ではなくなっていた。部活で体を動かし汗を流せることの喜びを感じた。女子の歪んだ人間関係も、所詮は平和慣れた精神が生み出す妬みや不安が要因のお遊びだと思えた。期末テストでは学ぶことができる幸せに気づき、いつも以上に勉強に身が入った。いつしか父が言った、

「人生は死ぬこと以外、かすり傷。」

この言葉の本当の意味を、ひいじいちゃんの話聞いた後から分かるようになった気がする。小さなことで悩んでいた過去の自分が、今では馬鹿らしかった。「たとえどんなに辛いことがあったとしても、死ぬ瞬間まで精一杯生き抜いてやる。」自分でも驚くことに、そんな強い私になっていた。

テストも終わり、一学期も残りの日数を数えるほどになった日だった。自分の人生観が変わった体験を誰かに話したくて、みんな戦争についてどう思ってるのか聞きたくて、いつものメンバーの会話に混ざった。しかし話の中身は、

「昨日の動画見たあ？」

「見た見た！あれマジウケるんだけど！」

「ガチそれなー。草あww」

とまあこんな感じだ。もちろん私もそれに合わせていく。それがこの環境を生き抜く術だから。とにかく、戦争の「せ」の字も出せる雰囲気ではないのだ。今までの私自身も含めて、「今どきの子」ってこういうものだ。興味があるのは表面的な部分ばかりで、流行りやメイク、恋愛以外には無関心だ。そんなことを日々、実感させられた。

終業式が終わり、夏休みに入った。一学期の成績が以前より良かったからか、母は最近機嫌がとても良い。少し反抗的な態度でも目をつぶってくれているのが、私にだって分かるくらいだ。とりあえず今は、次のテストまでこの機嫌が続いてくれるのを願うしかない。

夏休みとはいえ私のスケジュールはいっぱいだった。部活はもちろん、一学期の復習や二期の予習、夏休みの宿題も山のように出された。気付けば高校二年の夏だ。意識の高い人はもう受験態勢に入っているもおかしうはないのだろう。母が夏期講習の申し込みを検討していたようだったが、必死に止めてよかった。なんとか交渉して、塾は部活を引退してから、ということになった。大きく成績が落ちなければ、という条件付きだが。

お盆が近づいてきた頃、部活は休みになった。先生達もお盆休みが必要なのだ、私にとってはありがたかった。さすがに疲れが溜まってきたし、お盆には法事があるのだ。祖母の三回忌だ。父の実家でお経をあげてもらった後、皆でお墓参りをするのが慣習だ。お墓に行くのは久しぶりだった。一周忌の時はタイミンク悪く流行り病にかかってしまい、参加できなかった。実はひいじいちゃんと話をしてからずっと、お墓に行きたいと思っていた。自分でも意外だったが、修正さんの事を考えていたからだろう。

そういえば前回ひいじいちゃんに会ってから、私は日本兵の夢を一度もみていない。始めはあんなに怖かったのに、自分でも不思議だが今では修正さんだったであろうあの人に会いたい気がしていた。伝えたいこと、聞きたいことだって数多くあるのに。不可能だと分

かっている、私はこれで良かったのか、これからどうしたら私達は間違えずにいられるのか。そしてふと、今も世界で絶えない争いが頭をよぎる。

「また同じ過ちを、私たちは繰り返す……」気づけば口にしていた。しかし、答えの無い問いがぐるぐると頭の中を回り続ける。

お盆になり、法事が済んだ。ひいじいちゃんは病状が悪化しているらしく、入院していて参加できなかった。残った皆でお墓へと向かう。車で山側に五分ほど走るとお墓の入口がある。そこからは田んぼのあぜ道のような細い道を、一列になって歩いて進んで行くのだ。今日は最高気温が三十四度の予報が出ている中、汗で制服のブラウスが背中に張り付いて気持ちが悪かった。正装の大人たちも皆黙って汗を拭いている。大人って大変だな、と思ったが口には出さない。

お墓に着くと皆、テキパキとお墓の掃除や、お花の準備を始める。田舎のお墓は何しろ大きいから大変だ。墓石でさえ三つある。その一番右。所々が欠けていて、古いが大きな墓石があった。文字は削れて見づらいが、「戦没者」の三文字が読み取れた。慌てて駆け寄り、左右の面を確認する。その左側面、確かに「修正」の文字がある。

「これが修正さんのお墓だ！」

思わず声を上げていた。だから何だという顔をする人もいれば、誰それ？みたいな顔の人もいる。少し恥ずかしくなって、どうしたらいいか分からなかった。すると父が黙って何かを手渡してくる。真新しい濡れたタオルだった。墓石を拭き始めた父に感謝しつつ、私も一緒になって必死に拭いた。

あまり手入れをする人がいなかったのだろうか。ついさっきまで真っ白だったタオルがあつという間に汚れてしまった。だが、どれだけ真っ黒になっても、私は拭き続けた。拭き続けなければならぬ気がして。滝のように流れる汗を拭いながら、心に戦争のことを

刻むようにして、汚れを落としていく。戦争の時代を生き残ることのできなかつた若い人たちにも、希望のあふれる輝かしい未来があったはずなのに。そんなふうに思いつつも、私の脳内にはまた新たな思いや考えが巡る。数多くの争いで命を失った人々は、世界に何人いるのだろうか。数も数えられないほどに多く、今なお増え続けている。同じ人間なのに。こうして私たちが生きている今も、世界の各所で戦争や紛争は絶えない。そうして罪なき命がまた一つ失われていく。戦争なんて、人類が滅ぶまでの長い道のりをショートカットしているのと同じだな、と思った。八十年経った今でも、決して私たちに無関係な話ではないのだ。

掃除も一通り終わり、仏花もお供えした。お線香の束に火を付け皆であげ、手を合わせた。顔を上げると今までに亡くなった人たちの名前が目に入る。ふと、以前動画サイトで見た話が思い出された。「動物は、死後に残る体の一部で数えられます。鳥は羽が残るから何羽、牛は頭が残るから何頭。それと同様に人間は、死後に名前が残るので何名と数えるのです。」

確かにそうかもしれない。でも、名前だけが残って一体何になるというんだろう。その人がどんな人で、どんな生き方をしたのか。永遠に伝えていくのは不可能だとしても、少しでも後の世代に残していきたい。それが名前を残すこと以上に、大切なことのように思えた。まだ未熟な私だけど、伝えることで平和への道が拓けるようにと願っているのかもしれない。

蝉が鳴いている。今年の夏はとても暑い。来年の夏も暑いのだろうか。墓石に刻まれた「修正」の文字にそつと触れ、指でなぞる。来年の今頃、私も修正さんと同じ十八歳になる。

(指導教諭／渡 辺 典 子)

## 《作品の意図》

戦後80年を迎えた今。我々は、戦争の記憶が風化しつつあるという問題に直面しています。「若い世代が同じ誤ちを繰り返さない為に、何ができるか。」女子高校生になるであろう自分に重ねた物語です。読者が戦争を知る糸口になることを願っています。

## 《作品の寸評》

戦後八十年を迎えた今、戦争とその時代の人々の人生に思いを馳せ、正面から向き合った秀作である。

部活動と人間関係に疲弊して過ごす高校一年の主人公は、好きな曾祖父の病気に心を痛めるが、曾祖父に若くして戦死した兄がいたことを知り、それをきっかけに関心が薄かった戦争に興味を持つようになる。曾祖父が語った兄にまつわる話は衝撃的で、主人公の日常を変え、「たこええどんなにつらいことがあったとしても精一杯生き抜いてやる」という決意が生まれる。

「地震による津波」や「流行り病」などの出来事を重ねることで物語のリアリティを増し、曾祖父の兄、修正さん命名のエピソードや「死ぬこと以外はかすり傷」「生と死は真逆に見えて、実は同じ人生の一つ」などの箴言、警句を織り込みながら話に引き込んでいく筆力は見事である。

また、興味がない戦争記事の新聞を「無機質な紙面」、母と娘の関係の変化を「新緑の香りをまとった風」が「優しく駆け抜けていった」、戦争について話す曾祖父の話しぶりを「最初のうちはタンスの奥から思い出という品を引っ張り出すように、ぼつりぼつりと」など、随所に工夫された表現が見られる。

墓石に刻まれた文字を指でなぞり、「来年の今頃、私も修正さんと同じ十八歳になる」という結びは秀逸であり、先人の生き方と思いを伝えていこうとする揺るぎない覚悟を感じさせ、前向きで力強く、爽やかな余韻を残している。

(審査員／伊藤 幸夫)